



うだが、小尾先生のことを思う時、多くのお弟子さんらはみんな先生からお受けになった薫陶深き学恩のことを直ぐに思い浮かべられるのかもしれない。私も先生の一応の学問研究の弟子筋に連なる者ですが、想い出と言えればそれに関わるものが少ないまこと不肖の弟子です。それでも、ただ一度だけ先生にお褒めの言葉のようなものをご頂いた記憶があります。一九八四年に、上海で復旦大学主催の日中学者の『文心雕龍討論会』が開かれ日本から数人の方々が招待され参加しました。小尾先生ご夫妻もご出席されていて、ある夜先生が私のお部屋までお訪ねくださり「これからは日本の若い諸君もこうして自分の研究成果を発表しに中国へ来た方がいいね。私は安東くんとうとうして参加できて嬉しいよ」というようなことを仰いました。これはどこかにも書いたのですが、斯波六郎先生がお亡くなりになられて後、助手になつて間もないころ、大学の図書館で先生の蔵書を譲り受けることになり、その本の下見のために小尾先生に従って先生のご自宅に伺った。びっくりするほどの本の山だった。五車之書とか汗牛充棟とかいう言葉をぼんやり思い浮かべていた私に先生は仰った「安東くん、学者になるっていうことは、大変なことなんだよ」と。学者になる大変さはその後思い知ったが、本の量は雑本ばかりで今もなお羞ずかしいほどしかない。

小学校から大学院まで、大学二年からの一年間の休学期間を入れれば、私は学校に一九年間に在学したことにな

る。その間、自分で恩師と思っている先生は小学校でお二方、中学校でお一方、高校でお二方、大学でお二方、教育自習でお一方、併せて八名おられる。この中で今もご健在の方は三名です。私の年齢が想像されます。中でも小尾先生とご一緒させていた年数は休学の一年を除いて、助手の期間も入れれば、なんと一二年間です。家内や娘や母親や兄姉の次に長い年月をご一緒させていたことになりません。修士課程を卒業見込みの年に助手に欠員が生じたので、大学院の授業も受けていいから助手をやってくれないか、と言われた。私は博士課程に行きたいと思っていたが、先生のお言葉に甘えさせていただいた。それから五年間小尾先生のお側で働くことになった。語学の講座に西谷登七郎先生と白木直也先生、文学の講座に小尾郊一先生と横田輝俊先生。教養部にはまだ語学の三迫初男先生がおられたらどうか？ 間もなくして先生の後任に伊藤虎丸先生がお見えになられた、と記憶する。助手になつて始めのころは、和刻本に巣くう紙魚退治をやったのをよく覚えていた。あの堆積まわっていた和刻本はどこにいったのだろうか？ 図書館で一括管理でもされているのだろうか、それとも今もまだ助手さんがせっせと紙魚退治をしているのだろうか？ 広島を離れて以後、母校の大学の研究室にあまり足を運んだ記憶がないので定かでない。助手になつて直ぐだったのかどうかそのうち、小尾先生がハーバード大学の研究資金援助かを受けて、横田先生の主導の下に『文選』

の李善注の典拠調べが共同作業で始まった。学部学生以上、院生と助手も参加した。演習の準備の時間や卒論研究の時間を除けば、大半の時間がこの作業に充てられていた。もちろんアルバイト料も出た。そして半期に一度くらいは、小尾先生のお誘いで中華料理の宴席が設けられたりした。始めの内は出典調べも面白いが、単調な作業なので、そのうち段々と飽きがくる。ノルマを過度に感じたりするようになってきた。仲介を受け持っている横田先生の要求はつい多くなってきた、みんなはそれを負担に感じるようになってきた。実際、やったことのある人なら解っているかもしれないが、『漢書』の音注なんかを探し出すのは大変なことだ。『漢書』一冊を四六時中繰らねばならない。繰っても見つけ出せなければ無いことになるが、見落としていくかもしれないし、有無の判断は容易なことではない。そして佚文なんかになれば、その判断は至難のことだ。佚文を集めてある本はいいが、そういう本はそれほど多くない。中華書局の評点本が出てから、この仕事は格段に楽になった。注が一条ごとに並べられているからだ。夏休みに手分けしてその各人の音注を引き出して音注表を作った記憶があるが、さぼった者もいて一部しか役立たなかった。もっと詳しく書いてもいいのですが、想い出すのも嫌なので簡略に書きました。いまここまで読んで下さって、ここに書いてある作業のことが何のことかよくは呑み込めない人は、こういう作業を実際にしたことがない人でしょうか。

ら、幸せな人です。この共同作業で先生と学生の間が段々と疎遠になっていくのを私は感じ始めていた。そういうころに、あの嵐が広島大学にも吹き始めてきたのです。大学改革というところでもない嵐でした。もうそれをここに事細かく書く気は今の私には無い。敗戦後にその組織の存在の検討を根本から検証されなかったのは、法曹界と大学だと言われたことがあります。とりわけ大学は学徒出陣を受け持ってきたのである。ベトナム戦争が始まってまたぞろ日本は焦臭い戦火にグンと接近した。朝鮮戦争以来だった。学生は穏やかなままにはいらなくなっていた。そしてなにより団塊の世代と言われた学生数の増加とその大衆化。学生という集団は、大学というものへこれまでも不満が無かったわけではないが、その不満は政治に向けられて自分たちの存在する場の矛盾への抗議まで行かずに外に振り向けられていた。自分の今立っているこの足場を変えずに、遠いどこかに向かつて吠えても仕方ない、というのが東大や日大の闘争の発端だったのだと思う。東大の医学部の研修生の問題から東大闘争は始まった。日大も授業料値上げが反対闘争の始まりだった。今の読売の渡辺オーナーそっくりの聴く耳持たなかった古田会頭と学生の団交が始まりだった。これまでは、安保と言っても政党やそれに属す労組の主導で学生運動は進められたが、この闘争はそんな表面的なことでは終わらなかつた。広島大学にも嵐はやってきてお決まりの大学占拠、研究室段階にまでそれは降りてくる。

自分の足場立場を問う闘いだっただから。自己の存在の意味を問う闘争などこれまで聞いたことが無かった。六〇年安保などとは全く異質の闘争形態だった。始めに考えた奴は、自分にとってこのやり方は必然だったのだろうが、その余波を受けた私らにとっては肉を抉るようなものになっていった。以前そのことについて書いた一文がありますので、ここに引かせてもらいます。「この世に起こりうる全てのことに対して個人にも責任がある、と言ったのはドストエフスキーだが、正にそういう実存の類の闘争だった。それ故、個人の存在の根を抉り出す壮絶な闘争になっていく。俺は関係ないなどと言えなかったのがこの闘争だった。団交の席で倒れる教官が数多く出たのは、ただ緊張と疲労だけではなかった、と私は思っている。私なども助手をしていて学生から厳しく問われた。学問研究をする意味、研究論文を書く意味、国税を食っている公務員としての存在の意味、納税者へ何を還元しているのか？ 何一つまともに答えられなかったが、自分自身もそういうことを日頃から疑問に思っていたから、これにはやはり参った。寝付かれない夜が続いた。私の恩師などはとうとう胃潰瘍にまでなって倒れた。これまでの闘争は激しく闘われても何故か個人の存在の根に触れることは無かった。たとえ有ってもそれはちよっぴりだった。屁理屈を少しつけるくらいでは、この闘争からは逃れられなかった。それは誰しもが感じた実感だったに違いない。ウーマンリブの発生もこういうこと

と関わっているわけだ。生きているなら自分の存在の意味を自分できちんと考えろ、というのだからこれはもう政治次元を遙かに越えて個人に突き刺さってくる。だから、家庭の中にも入って来ることになる。男と女の問題にもなってくる。「俺はいつたい何であり、お前はいつたい何なのだ?!」ということになる。男女が平等で、家庭が男女の共同体なら、男も女と同じように飯を炊き、洗濯掃除をし、子育てをしろ、というのがウーマンリブの主張だろう。これまでの運動だってそこまで行くべきだったのであるが、他者に根源的問いを問えば自分から先ず問わねばならなくなり、自分自身の検討を迫られるから、そこを巧みにさけて政治運動の次元で終わっていた。自分が何であるか？ などとは哲学の問題であり、運動の問題ではない、と言って逃げを打つことも出来なくは無かったが、中には真剣にそれを自分自身に問おうとした馬鹿正直も少なくなかった。そういう素直な人間たちの夢破れた結果が日本赤軍派のあの悲惨だと言えればそれは嘲笑を買うだろうか「私がこの文章をここにこのように長々と引いたのは、この運動が私ら広島大学の文学部中国語学文学研究室だけの限定闘争では無かったということを書きたかったからです。大学構内占拠中、私の一部の教官と共に構内への出入りを許されていたので、私も一味だと思われた同僚・先輩の先生方から、学生への説得を依頼された。中には一席設けて下さり、懇々と私を諭してくださる先輩も一人や二人ではありません

んでした。もちろん小尾先生も私へ幾度となく、ご懇篤の訓戒をくださいました。私は私一人の力で何とかなるような次元を遙かに越えていることをいつも弁解するしかありませんでした。その時に研究室と学生たちと私のことを心からご心配くださった方々に、今この場をお借りして衷心よりお礼を申し上げます。実はこの文章は、小尾先生をはじめその心優しい思いやりを示してくださいました方々へ、当時の実態はこういうことだったんです、という私のお礼を兼ねたものです。弁解文と取っていただけでけっこうです。ただここであの折りのお礼を言いたかったのです。小尾先生には、入学以来ずっとお世話になり続け、就職のお世話をして頂いた上に、奥さまとお仲人までして頂いたのに、先生のお考えになっておられた方向には、何一つそぐえないことになってしまいました。先生がそのころ私にお話になられたことで、印象に強く残っていることを一つ。小学校を卒業し中学に進学して、学校まで遠いので朝早く出かけなければならぬ。その途中で大店に丁稚奉公に出た知り合いの同級生が店の前で水撒きをしている。顔を合わせるのが辛くて遠回りをして行かれたそうです。私にも似た体験が何回かあるので、先生の複雑な気持ち解ります。小尾先生はこういう心優しい先生なんです。私はよく存じ上げています。高橋和巳が言うように、日本の知識人の原罪とは、能力によって同輩を蹴落とし、社会的ステイタスを上げても、心に何の痛みも感じないような人間の罪なのかも

しれません。もうだいぶ前になるが、広島で学会があった折りに、家内と一緒に大学の旧キャンパスを訪ねた。プラタナスの木だけが異様に伸びていて、周りは草だらけ、公園になっていそうだが、その類の何の設備も全くない。木造校舎が私らがゼミ以外の授業を受けた所だが、そこが更地になっていっているのを見るのは不思議な感覚である。研究室の有ったあの鉄筋の丈夫そうな建物ももちろんない。桑田変じて海となる、は古詩の世界だけのことではない。何もかもが消え失せてしまふ。いい思い出もあまり良くない思い出も、この建物のように跡形もなく消え失せてくれれば、人生もすっきりするだろうに。私は跡地を歩きながらそう思っていた。家内もここで青春を送ったのだから、感懐もまた一入だろう。卒業後、勤めてお世話になった理学部の建物が残っていたので、そちらの方へ歩いて行っていた。学んだ先生方のお顔、先輩・後輩の多くの顔が次々と浮かんで消えていった。吉柳さんお元気ですか？ ご主人はいい人ですか？ お子さんは設けましたか？ 幸井くん、きちんと家庭やっていますか？ 文学創作なんかのめり込んでもろくなことはないですかね。森山くん、品川の近くに住んでいた時に、会えばよかったね。何通かのお便り大事にとつてあります。安田くんは毎年賀状を送ってくれますから、安心していきます。希望に胸ふくらませて入学してきた新入生の君らを結局卒業させられずにお別れすることになったことをいまここに悔い詫びます。こんなこと

をいまさら言っても何かになる訳じゃないですが、兎に角、この場をお借りして、積年のお詫びを申します。あの森大伍くんが今春に亡くなりました。君らとは縁が深かったので一言、ご報告しておきます。私は私なりの決着を自分に付けなければならぬと思ひ立ち、小尾先生の墓参に信州へ今夏参りました。墓前に額づいても、小尾先生にお会いする機会の遅かったことを後悔するに終わるだけかもしれないが、何が何でも先生のご生地の諏訪にだけは行こうと思つた。三月にも計画したのだが、奥さまのご都合がつかず取り止めた。諏訪には夕方着いた。諏訪のSAから、諏訪湖と諏訪の町並みが一望できた。きのう電話で翌日の午前中にお邪魔することを奥さまと打ち合わせをしていた。その土地に入るからには先ずその土地の氏神さまへ詣でるのが礼だろうと思ひ、あの名高い諏訪神社の本宮へお詣りした。車で行つたのですが、私一人では、道に不案内なので、家内と娘に同行を願つた。翌日、早速奥さまにお電話を差し上げお邪魔させていただいた。奥さまは門口までわざわざお迎えに出てくださいっていた。位牌の前に額づき、「先生、やつとやって来ました。お伺いするのが遅くなつてすみません」と詫びた。仏壇では、先生がああのお顔で微笑まれていた。いつもとお交わりのないあの澄んだ丸い大きな瞳だった。それから、先生のお宅をおいとまするままで、上気興奮して一々の言行をはつきりとは思ひ出せないほどだった。奥さまはお氣を遣つて茶菓のあれこ

れをお勧めくださるのだが、何もかも上の空で、奥さまの先生とのお別れの日のお話をお聞きしながら娘は嗚咽するし、私はただこうして先生のお宅へあの四国から車を運転して遙々やって来たことに、自分ながら興奮していた。とうとう先生のお宅までやってきたのだ、ということまで忘れていた。先生の送り残した著書はないか、あれはこれとは奥さまはお氣遣いしてください。全てのご著書は、頂いていたが、一冊だけ見なれないご本があった。『教育者 小尾喜作 遺稿と追憶』という大部なご本だった。先生のお父上のごことが書かれた本だった。付箋が多く貼られていた。先生が読み込んでおられたのだろう。奥さまはそれを私にくださると言われる。先生の付箋が着いているので畏れ多くていただけません、と洩る私に二階にももう一冊あるから、それは安東さんがもらつてくれると主人も喜ぶから、と。私は奥さまのお言葉に甘えて頂くことにした。すぐ傍らの本棚には私が先生に差し上げた拙著が横にしておいてあつた。奥さまの優しいお心遣いだらう。その本にもあちこちに付箋が貼つてあつた。先生はあんなどうしようもない本をこんなに丁寧に読んでくださつておられたのか、と思うと胸がいっぱいになった。先生はあの本のどこに付箋を挟まれたのかを知りたい誘惑に駆られたが自制した。そのすぐ側にヨーロッパ旅行のアルバムが二冊あつた。これは奥さまにお願いし見せていただいた。奥さまと姪御さんのパリ・ロンドン旅行のスナップで埋まっていた。奥さまに

は失礼になるかもしれないが、私らが先生のお宅によく呼ばれてご馳走していただいた学部学生の頃から、奥さまは殆どお変わりないようにいつも若々しい。これは決して誇張ではなく、スナップはパリジェンヌと見紛うほど粋でスマートだった。娘も後で同じようなことを言っていたから、これは私一人の感想ではありません。疑う人は先生のお宅へお伺いし是非見せていただいた方がいいですよ。おいとまする前にもう一度先生にお別れをしたかったので、仏前に座る。何宗かお訊きすると真宗だそうで、浄土宗と日蓮宗はあまり「般若心経」を上げないので、悪いかなとも思いつつ、これが先生とのお別れかと思ひ、母が亡くなって以後、写経の真似事をしていたら知らぬ間について覚えてしまったその経をお唱えすることにした。三度上げようと思っていたけれど、一度に遠慮した。その時は緊張していて懸命だったが、後日思ったことは、小尾先生は、あの安東くんがお経を読むようになったか、ときつと苦笑されたのではないだろうか、と想像し自然と笑いがこみあげて来た。奥さまとお別れする寂しさに玄関で四人で手を取り合っと思ひ切り感泣した。もし先生と奥さまにお会いしてなければ、私の人生は全く違ったものになっていたのだろし、ここにこうしている娘もこの世にいなかったかもしれない。ご夫妻は私の生涯での最高の恩人です。私は思っていたことを正直に吐露した。小尾先生、奥さま本当にありがとうございました、と。帰宅後、頂いたご本をまるまる二

日かけて精読した。これを読んで小尾先生がなぜ私や西の生意気な生き方を許してくださったのかが私にはやつと理解できた。小尾先生のあの悠揚迫らぬ寛大な海容心もお父上から教えられ受け継がれたのだ、ということが解りました。この想い出の文章はここから始まらなければならなかったのですが、それはまたいつか機会があれば書かせていただきます。皆さんもそのご本を是非一度読んで見てください。小尾先生が益々親しみ深く近くに感じられます。お父上の克己高潔に頭が下がります。奥さまや令息の孟夫さんも登場されます。最後に、「じゃお前はお前に楯突く教え子を許すのか？」と問われたら、私は「絶対に許さない！」と答えるだろう。そして小尾先生のあの澄んだ黒い大きな瞳のお顔を想いだしながら「許してやろう」ときつと言ひ直すでしょう。

(二〇〇四・八・二四)